

「札幌バンド」と「熊本バンド」の狭間で

大島 正健

本井 康博

(同志社史資料室)

●石橋湛山

「少年よ、大志を抱け」を知らない日本人はまずいない。けれどもこれを世間に広めた功労者、大島正健を知る人は稀である。W・S・クラーク（またけ）の落とし子ともいべき「札幌バンド」の中でも内村鑑三や新渡戸稲造などに比べるときわめて陰が薄い。

大島が一九三七年（死去する前年である）に『クラーク先生とその弟子たち』を出版した際、いち早くこれを新聞で紹介

介した人に東洋経済新報社社長・石橋湛山（後に首相）がいる。すでにこの時点で大島の名は「一般には余り識られておらない」とある（『石橋湛山全集』一〇、五一―九頁、東洋経済新報社、一九七二年）。山梨県立第一中学校（現甲府第一高等学校）で二年余、大島から指導を受けた石橋は、自伝で恩師をこう偲ぶ。

「大島校長は、札幌農学校の第一卒業生で、有名なウイリアム・クラーク博士の直接の薫陶を受けた人であった。同氏は神奈川県の『海老名町』の生まれであったが、札幌農学校卒業後、しばらく母校

にとどまり、英語を教えた。

その際、学生中にズウズウ弁の者があって、発音を教えるのに苦心した経験から、音韻学という珍しい学問の研究に志し、後年それによって文学博士の学位も得たという学者であった。また札幌で、初めて教会「現札幌独立教会」を作り、その牧師を勤めたという、熱心なキリスト教徒でもあった。

しかし同時に、からだこそ小さかったが、物にこだわらず、意気の盛んな、豪傑はだの人であった。思うに、これらの性格も、一つは大いにクラーク博士の感



新島襄に贈られた大島正健の写真（札幌・武林写真所撮影。1887年か）

●共通する恩師

石橋が終生の恩師と仰ぐ大島は、札幌農学校第一期生の折りに、クラークの感化を受けて周知の「イエスを信じる者の契約」に署名をした。洗礼は函館のM・C・ハリスからであった。卒業後は、母校で教鞭を執る傍ら、一八八二年に教友らと札幌教会を設立し、牧師を兼務した。かつて農学校在学中に「耶蘇坊主」（ミッシヨナリー・モンク）の異名をとった大島ならではの活躍振りである。

石橋は大島からクラークの話を聞いて「なるほど真の教師とはかくあるものかと感動した。『中略』つまり私もクラーク博士になりたいと思ったのである。私は今でも書斎にはクラーク博士の写真を掲げている」とクラークを心底から慕う（同前、一六頁）。日蓮宗の寺で生まれた石橋は、「生来、宗教家になるべきはずの境遇に育った」ので、「常に宗教家的、教育者の志望」があったことが大島・クラーク崇拜に繋がったのであろう（同前、一六頁）。

大島や佐藤昌介、伊藤一隆などの札幌農学校第一期生は、もちろんクラークが日本で教えた初めての日本人であるが、実は彼は来日前にすでに日本人留学生を教えている。新島襄と堀（内藤）誠太郎である。とりわけ新島に関しては「私の最初の日本人学生」とクラークは明言する。アーモスト大学で化学（あるいは植物学）を教えたとされている（拙稿「W・S・クラークと新島襄」上、下、『関西エルム新聞』四八、四九、北海道大学関西同窓会）。

実は大島と新島は、日本人の恩師も共通する。川田剛である。川田は安中藩板倉家の本家、備中高梁藩主の板倉家に仕える漢学者で、江戸の安中藩邸でも安中藩士を指導した。一八五六年頃、新島も指導を受けた（『新島襄全集』八、九頁。以下『全集』。一方、大島も川田が自宅（牛込若宮町）に開いた逢坂学校に一八七四年一月から一年余、在籍している（大島正健著・大島正満補訂『クラーク先生とその弟子たち』一八頁以下）。

新島がアメリカ留学から帰国するのは一八七四年十一月。翌月にはさつそく川田を訪ねて挨拶し、同家に一泊して旧交を温めている（『全集』八、一三三頁）。当時、大島は川田の私塾にまさに在学中であったので、新島とは至近距離にあったことになる。

●新島襄との交流

さて、「札幌バンド」の面々と新島とは種々の交流がある。なかでも大島正健は内村鑑三、佐藤昌介、新渡戸稲造ら以上に新島に深く傾倒した。「札幌バンド」

の中で、もつとも深く新島の懷に飛び込んだのは大島である。「札幌バンド」が創立した札幌教会の牧師を、大島が務めていたからである。新島が、同教会に係わるのは一八八四年二月のことで、「熊本バンド」の金森通倫（岡山教会牧師）が大島（札幌教会牧師）と交替する案がどこからか新島に持ち込まれている（『全集』五、二四六頁）。

ついで一八八七年、新島夫妻が札幌でひと夏、福土成豊（函館から密出国した際、手引きしてくれた福土卯之吉）の持ち家を借りて静養した際、新島と大島との距離は一挙に縮まった。

まず七月七日、大島は福土と共に札幌駅に新島夫妻を出迎えた。翌日には新島を訪ね、札幌教会の教派所属問題、ならびに伝道師招聘人事について協議をこらした。新島は日曜には札幌教会に出掛け、大島の説教に耳を傾け、自らも勧話をを行った（同前五、二九六～二九七頁）。

続いて大島は新島を市来知（現三笠市）の伝道所に案内した。新島は同地の空知集治監（刑務所）で講話をした。また大島は新島らを同伴して定山溪へ行き、二

泊したこともある（同前八、四一～四一三頁）。新島夫人の回想によれば、「札幌ニテハ親シキ友人トテハ一兩人（其一人ハ大島正健兄也）アルノミ」であった（『新島八重「亡愛夫襄発病ノ覚」八〇頁、『同志社談叢』十）。

さて、大島が新島に依頼した伝道師の件であるが、新島は同志社神学校出身の馬場（竹内）種太郎を第一候補に立てた。そしてすぐに札幌から宮川経輝や金森通倫に書を送り、その線で原田助とも協議してほしいと要請した（『全集』八、四一〇頁）。「上方地方より」ぜひ人材をとの大島からの要請（同前三、四七三頁）を新島は千載一遇の好機と捉え、自分が馬場なら、「賢ヲ置テモ借金シテモ此招待ハ無ニ致スマジ」とまで歓迎した（同前三、四七五頁）。

さらに新島は北海道からの帰途、東京で馬場に会って直談判し、鳥取から札幌への転勤を勧めた。京都に帰宅後、新島はその旨を大島に書簡で知らせると同時に、北海道（さしあたつては石狩川平原）一円の伝道拡大策を提案している。空知、江別、岩見沢などに「自治独立ノ教会、

すなわち「札幌ト同主義教会」を次々と建設されたい、そして「自由主義ノ教会」を今後の「北海道ノ依テ立ツヘキ基礎」としてほしい、というのである（同前三、四八四～四八五頁）。大島は北海道における自由主義の旗手であることを期待されたのである。

時あたかも教会合同運動のさなかであった。新島は札幌を起点に開始された北海道伝道が、組合教会（同志社系）と同様の「自治独立」主義で進められることを心底から願った。「自由を決して安売りするな」との大島への勧告は、教会合同運動推進派への警告とまさに重なる（同前）。一致教会との合同は、新島には「自由主義」や「自治独立」原則の放棄にはかならなかつた。その意味では、「日本のニューイングランド」とも言うべき北海道はニューイングランドの精神的支柱である会衆派（その日本版が組合教会）が同様に責任を負うべきであった。

ところで新島はクラークを「札幌好物ノ人」と評するが（同前三、三四二頁）、新島も負けてはいない。もしも教会合同が不幸にも実現した場合、自分は「北海

道へ退くのみ」と柏木義田に漏らしている（『同志社五十年史』一六二頁）。新天地には自由主義が似合うのである。

さて馬場は札幌赴任を承諾した。札幌では大島は馬場を自宅に引き取って面倒を見た。こうして伝道師派遣の件は首尾よく収まった。が、問題は今ひとつ、札幌教会の教派所属問題（独立問題）であった。

●札幌教会の教派問題

この年（一八八七年）、札幌教会は総会で、牧師資格がない大島に洗礼・聖餐の二大礼典を執行する権限を認める決議をした。ところがこれがキリスト教界で非常な物議を醸し出し、特に北海道在住の宣教師の中には「札幌教会は異端集団」とまで痛罵する者さえいた。札幌農学校教授の傍ら、無給で教会運営に当たっていた大島は進退きわまる窮地に立たされた。他教派の牧師や宣教師から牧師資格を得るための按手礼を受ければ、教会が標榜する「独立」（無教派）が侵されるからである。たまたま札幌での避暑中に

大島からこの件の相談を受けた新島は、事態を憂慮し、大島に按手礼を受けるよう助言した（『全集』三、四八四頁）。

もちろん新島は各派の協力を取りつける労を惜しまなかつた。帰宅途上、東京でキリスト教各派の代表者と協議し、札幌教会はどの教派にも所属しないとの条件で、大島に按手礼を施し、彼が牧師となつて聖礼典を正規に執行できる道を拓いた。

大島の按手礼試験は一八八八年一月十三日、按手礼は同月十七日に東京一番町の一致教会で行われた。立ち会ったのは、一致教会の植村正久と井深梶之助、メソジスト教会の本多庸一、組合教会の小崎弘道などであった。

席上、植村が「大島氏が将来、異端説を唱えたら、どの教派が責任をもつのか」との疑問をぶつけたので、小崎は「今回の主動者である組合教会が持つ」と約束した（『クラーク先生とその弟子たち』二二一頁）。事実、翌日には小崎は新島に、按手礼は無事に済んだが、「然シ他教会牧師等ノ勧告ニより組合教会ニテ責任ヲ持ツ事ニ相成候」と書き送つた

（『全集』九上、三三三頁）。

このことがたまたま在京中の札幌教会員から曲解された形で札幌教会に伝わった。その結果、教会員たちは「大島先生は新島のペテンにかかつて組合教会牧師として按手礼を受けた」と激昂し、大島が帰札したときには駅に出迎える会員は皆無という有り様であった（『クラーク先生とその弟子たち』二三二頁）。

大島が「誤報」と呼ぶこの出来事は後々までも尾を引き、札幌教会二十五年史（一九〇八年）に竹崎八十雄、有島武郎（共に編集委員）が史実として記録した。大島は「新島先生と私とに大なる恥辱を与えた」編集委員の「不徳は言語同断」と切り捨てている（同前、二三二頁）。この誤報事件はまもなく大島が牧師を辞任して同志社に転職する一因となつた。ちなみに竹崎も有島も一時期、同志社教育に係わつた人材である。

さて、その後大島は一八八八年十二月にいたつて京都の新島から書簡を受け取つた。その内容は新島最晩年の二大運動、すなわち同志社大学設立運動ならびに教会合同運動についてである。注目すべき



新島襄が机上に飾っていた「満ボウ」(三歳)の写真(1887年、武林写真所)

は後者で、「貴兄御心得ノ為ニ」、しかし他言は無用と断つて、新島の合同反対意見が縷々陳述されている。ここでも再度、「自由主義ヲ曲ケ」てまで合同する気は全くない、とある(『全集』三、七〇二頁)。この点は翌年の大島宛書簡も同様で、「独立平等之教会」を発展させ、「北海道之元氣精神」たらしめよ、と発破をかける(同前四、二〇四頁)。新島は大島に組合教会の原則をとくと理解してはなかった。が、一方の大島はどちらかというと、「連合(つまり合同)の方に傾き」がちであった(同前九上、五二四頁)。ちなみに微笑ましいことに、これら両書簡とも文中で「満ボウ先生」への言及がある。子どものいなかった新島夫妻に

とつて大島の長男、正満(当時三歳)はまるで実子であった。正満は後年、「新島のお父さん」を偲んで書いた『新島襄の面影』(未刊)の中で「私はおさない時ジョセフ新島のベットであった」と述懐している。

●札幌から同志社へ

さて、大島が師事した新島は一八九〇年に死去した。まもなく、馬場は独立教会伝道師を辞任し、同じく同志社出身者の中江汪に後を託した。さらに新島の死後三年を経て、大島は骨を埋める覚悟であった札幌を後にして、同志社普通学校に赴任した。「先生(が)生前私との間に結ばれた約に従い」と大島が記すところを見ると、かつて新島から声をかけられたことがあったのか。ただ、札幌農学校辞任の最大要因は、「北海道バンド」の盟友でもある佐藤昌介校長心得の「裏切り」にあるという。彼は帝国大学昇格の必要上、キリスト教色を一掃するため大島(牧師)を農学校から「追放」したというのである(大島智夫「Boys, be

正満の成長は「新島のおばさま」(八重)をことのほか喜ばせた。新島旧邸を訪ねた「満ボウ」は亡き新島の机上に自分の額入り写真を発見して感動した(『新島襄の面影』)。

大島は同志社に数学教授として一八九三年十月二十四日から一八九六年七月七日まで勤務した。月給は市原盛宏(政法学校教頭)と同額の六十円。教員の中では高給取りであった。一八九五年には普通学校教頭事務取扱、ならびに神学校別科嘱託(英語訳読)を兼務した(『同志社報告』一、二、明治二十六年度、明治二十八年年度)。

けれども同志社生活は三年で終わった。同志社で支配的な「熊本バンド」の折り合いがうまくいかなかったためか。クラークの精神を「熊本バンド」が牛耳る同志社に移植するには最初から無理があった、との推測もある(北垣宗治『新島襄とアーモスト大学』三七五頁)。

いずれにせよ新島という大きな後ろ盾を失った大島には、同志社はあまり居心地のよい職場ではなかったかもしれない。そのためか、影もうすい。彼の辞職

の際、同志社は慰労金として六十円を贈った(明治二十九年重要報告)。

同志社を去った大島は私立奈良中学校長、山梨県立甲府中学校長、宮崎県立中学校校長、朝鮮京城府セベラン医学学校教授、私立養正高等普通学校教授、京都理科大学講師などを歴任した。このうち甲府での評価は石橋の尽力もあって突出して高い。一九六五年十月二十三日には甲府第一高等学校に大島(いわば「甲府のクラーク」!)の顕彰碑が建てられた。大島の門弟、石橋も同校のために「Boys be Ambitious」を揮毫している。一方の同志社には、彼を偲ぶものは何ひとつない。同志社からは彼の下でひとりの石橋湛山も生まれなかった。



新島旧蔵アルバム中の大島正健夫人・千代(武林写真所。1887年か)



同志社普通学校卒業式写真(部分、1894年6月)。①大島正健、②湯浅吉郎、③市原盛宏、④J.D.デイヴィス、⑤下村孝太郎、⑥須田勝三郎、⑦新島八重

ambitious」が世に出るまで」三二〇〜三四頁、『関西エルク新聞』(四十二)。

とすれば、佐藤に捨てられた大島は新島に拾われたことになる。それゆえか、大島が京都で真っ先に訪ねたのは、若王子山の新島の墓であった(『クラーク先生とその弟子たち』二三八頁)。息子の

《略歴》大島正健(おおしま・まさたけ)(1859.8.13~1938.7.11)

相模国高座郡海老名郷で誕生し、海老名学舎で学ぶ。学力を買われて、助教を命じられる。同舎教師で山田方谷門下の谷資敬(元備中高松藩士)の勧めで、1874年東京に出て、谷と同門の川田剛(元備中松山藩士)が経営する逢坂学校に入る。翌年、官立東京英語学校に転じ、さらに1876年に新設の札幌農学校に開拓使官費生として入学。在学中、W・S・クラークの指導を受けて、キリスト教に入信。「札幌バンド」のひとりとなる。第二期生の内村鑑三らに猛烈な伝道攻勢をかけ、入信に導く。卒業後は開拓使御用係として母校で英語と数学を教授する。1893年に離札以降、同志社普通学校に赴任、その後各地で校長などを務める。その間、音韻学の研鑽を独学で積み続け、『支那古韻史』(1919年)で京都大学から文学博士号を得る。音韻学に関する著書は多い。夫人は札幌農学校第一期生(「札幌バンド」)の伊藤一隆の妹、千代。新島夫妻が寵愛した「満ボウ」こと正満(長男)は後年、動物学者(理学博士)となる。